

研究拠点として旧富士山測候所の活用を大切さを訴える浅野勝己筑波大名誉教授(2日午後4時50分ごろ、富士山頂の観測候所)

静岡新聞  
山梨日日新聞  
富士山  
2014臨時支局

# 無人測候所研究者集う夏

## 10年が経過

富士山頂の旧富士山測候所が2004年に無人化されて10年。一度は役割を終えた場所は現在、延べ400人を超える研究者の観測拠点となっている。国境を越え飛来する微小粒子状物質「PM2.5」やゲリラ豪雨に伴う雷、高山病対策など、日本一の観測タワーが担う役割は着実に広がっている。

「偏西風に乗って飛来する大気中の化学成分を、都市部の汚染などの影響を受けずに知る」ことが出来る絶好のポイント。中国の深刻な大気汚染から注目が集まるPM2.5の研究を続ける埼玉環境科学国際センター専門研究員の米持良一さん(45)は富士山頂での観測のメリットを語る。米持さんらは昨年か

## PM2.5、豪雨の雷…

## 「観測 絶好ポイント」

ら、富士山頂を含めた日本、中国、韓国でのPM2.5の同時観測を開始した。十数日間の同時観測に備え、7月25日に山頂に採取装置を設置。「越境汚染が起きた場合、物質の比率や気象条件などから国内への影響を知ることが出来る」(米持さん)という。

測候所を借り受けてことし8年目の夏期観測を行っているNPO富士山測候所を活用する会(東京都・島山史郎理事長)は、観測期間中の研究者に富士山での大気観測について説明する米持良一さん(左)と2日午前8時40分ごろ、富士山富士宮口6合目付近



間を過去最大の60日間に延長し16の研究を進めている。高山病のメカニズム

### 関連記事①

研究を続ける浅野勝己筑波大名誉教授(78)は、高所訓練を兼ねた大学生向けの科学講座を測候所で開催するなど教育活動に力を入れる。

夏期観測参加者のうち4割以上が学生で、ことしは大学生による模擬人工衛星の運用実験など新しいプロジェクトも加わった。

一方、年間3千万円に上る運営費は研究助成金や寄付に頼っていて、資金確保が最大の課題。浅野名誉教授は「継続的な観測のため、国立の研究機関とするなどして発展させていくべき」と測候所の維持・活用の必要性を訴える。